

## 第二章 ファーナの姫巫女

巨樹キョウジュが燃えていた。樹齡六千年を越えるような巨大な木々たちが。

めくれ上がった樹皮を炎の舌が舐なめ、ぱちぱちとはぜるような音がしたかと思うと、煙を上げる間もなく一気に燃えあがる。

突然まきおこった爆炎ばくえんに泡あわを食った森の動物たちが、炎の中心へと向かうミアネージュとすれ違いに、すぐ脇わきを走り抜けていく。

「あちっ……」

熱気をはらんだ空気の壁に行く手をさえぎられ、ミアネージュは思わず顔を腕で覆おほって足を止めた。

「と、とにかく火を消さなきゃ……」

意識を前方の空間に集中させる。

一瞬後、ミアネージュの頭上に光り輝く小さな球体が出現した。

「アクアエマーゼング！」

小さな光球に引きつけられるようにして、大気中の水分がみるみるうちに塊かたまりとなり、巨大な水球をつくりだしていく。

「散っ！」

ミアネージュの口から発せられた短い思念呪言しねんじゆいげんにより、水球が弾け飛んだ。

燃えさかっていた炎が、かなりの範囲にわたって勢いをそがれ下火になっていく。だが、完全に消火できたのは、ミアネージュの周囲のわずかな空間のみだった。

「ちよっと水量が足りなかったかな……」

あたりに立ちこめる、蒸し返るような空気の中、ミアネージュはひとりつぶやいた。

「もう一度……」

言って、ワンドを構かまえたそのとき。

何の前ぶれもなく、凍いてつくような冷気が、波動となって前方の空間から押し寄せてきた。

あつという間に炎が鎮火し、世界が凍りついていく。

ミアネージュはあわてて結界を張り、凍える冷氣から身を守った。

「なつ、絶対零度結界陣!? レグルス……じゃないわよね。冷氣系魔法はあまり得意じゃないもの」

結界の中からいくら瞳をこらしてみても、レグルスの姿は見つからない。ダイヤモンドダストが陽の光に煌めくばかりである。

「レグルス、防御結界張るの下手だから凍りついてなきやいいけど……」

アクアエマーシングの魔法でつくりだした水を自身のからだに振りまき、なんとか炎の壁を抜けたところで、レグルスは、たたらを踏んで立ち止まった。

すぐ目の前の地面が急角度で落ち込んでいる。ほとんど崖といってもいいくらいに。

「まじかよ……。いったいどんな魔法を使えば、こんなふうになるっていうんだ!?!」

魔法で穿たれた直径二〇〇メートルはあろうかという巨大なクレーター。そのすり鉢状になった焦土の中心付近に、悲鳴を上げた主とおぼしき女性が立っていた。

おそらく、ファーナの巫女なのだろう。白いケープのようなゆったりとした衣服に身を包み、ブロンドの髪を頭の高い位置で結い上げている。

その女性と相対しているのは、魔族ではなく、見たこともない四つ足の獣だった。体長は、彼女のゆうに三倍以上。黒褐色の軀に、斑模様の白い縦縞があり、盛り上がった筋肉がびくびくと波打っている。

「もしかして、あれが異界から墜ちてきたっていう魔獣か? にしても……」

その場の状況から、魔法を放ったのは巫女のほうであるということは、容易に推測がついた。今も彼女は精神を集中させ、胸の前で掌を向き合わせてそこに魔法の光球を出現させつつあった。

しかし、その魔獣は、まったくダメージを負っているようには見えなかった。あたりに生えている巨樹を一瞬にして消滅させ、大地の形をこれほどまでに変えてしまうような魔法攻撃を受けながら……。

有り得ないことだった。

「炎に対して耐性があるのか、あるいは並外れてタフなのか……。どっちにしろ、かなりやばめの相手であることは間違いないな」

崖を滑り降り、マントを外して急ぎ加勢に向かう。

仮にもファーナの巫女が、魔獣相手に後れを取ることなど考えられなかったのだが、レグルスは自分の直感を信じることにした。

異変は、クレーターの底に降り立ったときに起こった。

レグルスの目の前の空間が突如闇色に染まり、裂けた。

その裂け目を通り、異界より姿を現したのは炎を纏った真紅のユニコーンだった。

「何!？」

だが、考えている暇はなかった。

そのユニコーンは、額の角からいきなり火炎を放ち、襲いかかってきたからだ。とつさに地を蹴り、横に跳んで炎をかわす。が、ユニコーンはレグルスの動きに追隨し、首を捻ってふたたび火炎による攻撃を仕掛けてきた。灼熱の炎が頬をかすめ髪を焼く。

レグルスはすばやく身を起こし、低い姿勢のまま剣を鞘走らせた。

レグルスの放った神速の剣が真空波を巻き起こし、炎を切り裂くと同時に真紅のユニコーンを両断する。

「新種のユニコーンか……」

レグルスは絶命した真紅のユニコーンに一瞥をくれ、躰の向きをかえた。しかし、その瞬間を狙ったかのように、背後で闇が拡がった。

「!」

気配を感じ、ふり返る。その目に飛び込んできたのは、全長二〇メートルはありそうな灰褐色の大蛇だった。

「へっ、今度は蛇かよ……」

そうつぶやいて剣を構えなおしているあいだにも、巫女のすぐ側の空間にできた裂け目から、巨大なサンショウウオが現れようとしていた。

レグルスは理解した。ファーナの巫女が悲鳴を上げ、高レベル魔法を連発したわけを。また、彼女が対峙している魔獣が、はじめからそこにいたわけではなく、新たに異界から召喚されたのだということ。

鎌首かまくびをもたげて襲おそいかかってきた大蛇をフォルシオンで一閃いっせんしながらレグルスが叫ぶ。

「くっ、どこにいる！」

どこかに、この魔獣たちを異界より召喚しょうかんしている者がいるはずだった。が、どこにもそれらしい人影は見あたらぬ。ことによると、魔法で姿を隠しているのかも知れなかった。

一方、ファーナの巫女は、魔獣の爪による猛攻を防御結界を張ってなんとか凌しのぎつつ、新たな魔法の詠唱に入ろうとしていた。

「ちっ……」

レグルスが舌打ちする。仕留しとめたと思った大蛇が、傷を再生させ、ふたたび襲いかかってきたからだ。

大きく開いたその口腔こうくわうめがけ魔法を放つ。

「フレイムグレネード  
爆裂火球弾ツ！」

一瞬後。大蛇は紅蓮の炎とともに四散した。  
しかし。

レグルスが大蛇を倒すのに手間取っているあいだに、巫女の周囲は異界から召喚された魔獣で埋めつくされていた。

「まずいな……」

ぎりっと奥歯をかみしめる。

そのときふいに、ファーナの巫女の思念波が、レグルスの頭の中を矢のように突き抜けていった。

「これから、絶対零度結界陣アブソルトデスを放ちます。急いで結界を張ってください」  
「なっ……」

レグルスは思わず蒼くなった。絶対零度結界陣は、冷氣系魔法のなかでも最高レベルに属する瞬間凍結呪文だったからだ。

レグルスは、手にしていた剣を大地に突き刺し、迷わず結界を張りにかかった。防御系魔法や治癒系魔法、そして移動に関する魔法などは、とくに呪文の詠唱を必要としない。だが、なれないうちは精神集中のため、それなりの時間が掛かってしまうのだ。

レグルスは前方に両腕を突きだし、掌てのひらにすべての神経を集中させた。

ファーナの巫女の凜とした声。よどみなく流れるような呪文の詠唱を、かすかにではあるがレグルスの耳は捉えていた。結界が完璧なものならば、外界の音はいつさい聞こえなくなってしまうはずなのだが。

はじまりは雪のひとひら

乱れる微かな吐息

雪姫の舞

幾千の凍える結晶とともに

白く

もつと白く

負の力を持つ精霊たちよ

凍てつく波動で世界を覆いつくせ

そして生に疲れたすべてのものに

永久なる静寂の眠りを

呪

雪華氷結晶

間に合ってくれ！

レグルスが心の中で念じたまさにそのとき、巫女の唱える呪文は完成した。

『絶対零度結界陣！』

ピシッ！

大気が悲鳴を上げ、真っ白に凍りついていく。

「ぐっ……」

空気を流体化させた結界を二重に張り、結界と結界のあいだに真空の層をつくりだすことで凍気の伝播は完全に防げるはずだった。

が。

一瞬で身体の芯まで凍りついてしまうような冷気が、結界内を徐々に満たしていく。

足もとから立ちのぼってくる冷気を押しとどめようにも、レグルスはこれ以上の防御魔法を知らなかった。

まずはじめに指先の感覚が失われた。

またたくまに体温を奪われ、心臓の鼓動もあやしくなりはじめる。

うそ……だろ？

こんなところで、おれの人生終わりかよ……。

何かものを考えることができたのは、そこまでだった。レグルスの意識は急速に薄れ、深い闇の中へと沈んでいった。

「……っかり！　どうか、しっかりしてください！」

どこか遠くのほうからその声は聞こえてきた。クリスタルグラスを指で弾いたときにでるような、澄んだ響きの声だ。ミアネージュの声に似てはいるが、微妙にちがう。

「……う……!？」

「お気づきになりました？」

声にうながされるように、レグルスはまぶたをひらいた。

視界に飛び込んできたのは、ファーナの巫女の心配そうな顔だった。

一気に凍りついていた意識が氷解した。

そっか、おれは絶対零度境界陣の魔法効果を完全に防ぎきれなくて……。

レグルスは冷たい大地の上に仰臥ぎようがしたまま、自分のかたわらに膝ひざをつき、手にぎってわくわくしている姫巫女の顔を見やった。

「……………」

清楚せいそで可憐かれん。ただ単に外見が美しいというだけではなく、一目で恋に落ちてしま

いそうな不思議な魅力が彼女にはあった。とくに印象的なのは、アメジストのような紫色の瞳である。

自分が置かれている状況も忘れ、レグルスはまるで魅惑の魔法にでもかかってしまったかのように、ぼうつと姫巫女の顔を見つめつづけた。

「あの、どうかなさいましたか？」

姫巫女に、瞳をのぞき込むような感じで問いかけられ、レグルスはハッと我にかえった。

「あ、ああ、だいじょうぶ……って言いたいところだけど、からだが思うように動かない」

「からだの感覚は、あの、じきにもどるかと存じます。でも、ほんとうに申し訳ありません。巻き添えにしてしまつて……」

「いや、きちんと防御結界を張ることができなかったおれが悪いんだ。それより、からだ起こしたいんだけど、ちょっと手伝つてくれないかな？」

「あ、はい」

レグルスは、姫巫女の助けを借りて半身を起こし、ようやく一息ついた。

「えっと、きみは……」

「あ、自己紹介がまだでしたね。 わたくしは、ファンネリア。

ファンネリア・リリス・ル・キュートレイ。種族はフェアイリス。ファナーの神殿に仕える巫女の一人です」

「おれは、レグルス。レグルス・シオン・ル・クロノウイング。種族はフェアリス。魔剣士の称号を得るために、目下修行中つてとこかな」

「じゃあ、もしかしてファナーの神殿に？」

レグルスは、黙つたままうなずいた。

「でも、いくらなんでも無茶ですわ。 たつたひとりである地下迷宮を抜けるのは……」

「えっと、とりあえず、一人は連れがいるんだけど……」

「それでも、かなり無謀なことに変わりありません。 わたくしが魔導士の資格を得るため、海魔ピュアネイレスの神殿 深海にある闇の迷宮に挑んだときは、五人でパーティーを組んでようやくといった感じでしたよ？」

「……………」

謎や仕掛けに満ちた迷宮を抜け、神殿の地下最深部にある水鏡の間まで、無事たどりつくことができれば、無条件で魔剣士の称号を得ることができる。

レグルスが、ミアネージュからそのことを聞いたのは、ほんの一週間前のことだった。

魔法厳禁。 そんな壁紙の張つてある道場の中に、連子窓をすり抜けた早朝のやわらかな日射しが、縞模様をつくりだしている。

脇腹わきばらに激痛を感じ、レグルスは意識を取り戻した。否いな。意識が回復したからこそ、痛みを感じるようになったと言ったほうが正解かも知れない。

「っ……………」

声はでたが、身体は動かさなかった。

床ゆかの上に仰臥ぎょうがしたまま、レグルスは天井を見つめ、つぶやいた。

「……………くそおやじめ、おぼえてろよ」

できれば、中指を立ててやりたいところだが、指一本動かせない今の状況では、無理というもの。泣く泣く諦めざるをえなかった。

ふいに、レグルスの顔の上でちいさな旋風せんふうが巻き起こった。

瞬間移動の前触れである。

たまゆらの後。

甘い香りがふわっと広がり、レグルスの顔の真上にミアネージュが出現した。

空中浮遊レビテースの魔法で宙に浮いたまま、ミアネージュはがらんとした道場のなかを見まわしている。

「あれ？ レグルス、きょうはもう上がっちゃったのかな？」

「……………」

もちろん、床の上に大の字で横たわっている、いまのレグルスから見えるのは、ミアネージュのスカートのなか……………ということになる。

なんの飾りもない白……………だな。

あいかわらず色気がねえの。

ま、見かけの年齢が年齢だけに、しょうがないか……………。

つて、これじゃあまるで、おれがたんなるのぞき趣味の変態野郎みたいじゃないか、そのまま気づかずに早くどっか行けよ。

できれば、今の自分の無様な姿ぶざまを見られたくはなかった。それが、嘘偽うそらざるレグルスの本心ではあったのだが……………。

運命の女神はそんなレグルスの気持ちなど知るよしもなく、せつせと業カルマの糸を紡つむいでいく。

「きゃっ！」

小さな悲鳴を上げ、ミアネージュがその場から飛びのいた。ようやく、自分の真下にいるレグルスに気づいたのだ。



「もうっ、レグルスのエッチ！」

頬を染め、あわててスカートの裾をおさえるその仕種は、まるで、年端もいかないちいさな女の子のようだ。

案外、ミアネージュの精神年齢は、彼女自身がふだん口になっているほど高くないのかも知れない。

ややあつて。

ミアネージュは、履いていた靴を魔法石の中に収納すると、磨きあげられた板敷きの床の上に、つま先からふわりと降り立った。

「レグルス？」

いぶかしげな表情でミアネージュが声をかける。

言いわけもせず、横たわったまま動こうとしないレグルスを不審に思ったのだろ。だが、呼びかけられてもレグルスは返事をしない。

「レグルス、その傷……」

惨状に気づいたミアネージュが息を呑む。

額、頬、腕……。肌の露出している部分だけをみても、レグルスの傷はかなりひどいものだった。

「もしかして、動けないの？」

「……なんでもない。あっちに行ってる」

硬い声で答えるレグルスの言葉などまるで無視。ミアネージュは黙って床の上に膝をつく、さっさとその道着を脱がしはじめた。

「よけいなこと、する……うっ……」

激痛が走り、レグルスの口から思わず呻き声がもれる。

「けが人は黙ってるの！」

傷の具合を確かめ、ミアネージュは顔を曇らせた。

「ひどい傷。肋骨が三本も折れてる……」

内出血を起こし、変色してしまった胸の傷に、ミアネージュの細い指先がそつとふれる。

やがて、その掌に、ぼうつと柔らかな光が生まれ、あたたかな波動がレグルスの全身をつつみこんでいった。

「まって、すぐらくになるから」

ミアネージュユの言葉どおり、いちばんひどかった脇腹から胸にかけての傷が急速に癒え、痛みがうそのように引いていくのが実感できた。

「それで……」

目を閉じ、治癒魔法によるヒーリングをつづけながらミアネージュユが質問する。

「きょうは何をしかしたわけ？」

「黙って奥義の伝書を持ちだした……。ただそれだけさ」

「ふう〜ん、そういうこと……」

いかにも納得がいったという顔つきで、ミアネージュユがうなずいた。

「でも、いくらレグルスが、将来この道場を継ぐことに決まってるからって、奥義の伝書をだまって持ちだしたりしたのは、やっぱりまずかったんじゃない？」

「……たのんでもたのんでも、いっこうに奥義を伝授しようと思わないおやじが悪いんだよ！」

感情が高ぶり、レグルスの声が思わず荒くなる。

「レグルスの気持ちも、わからない訳じゃないけど……」

あるいはミアネージュユにも似たような経験があったのか、その声には、やや同情的な響きを感じられた。

レグルスは、ため息をつくことでなんとか苛立ちをしずめ、意識的に声の調子を抑えてことばをつづけた。

「言っとくけど、おれはまだ伝書をひらいてなかったんだぜ。なのに……」

「まさにふんだりけったりね。これだけひどいめにあったっていうのに、けっきよく奥義もわからずじまいなんて……。でも、伝書には封印の魔法がかけてあったはずだから、ひもとして中を見ようとしても無理だったと思うけど」

しばし間をおいてからレグルスが聞き返した。

「……なんでわかった？」

「あ、やっぱり開けようとしたんだ」

「……それはいいから」

ミアネージュユは肩をすくめると、いつもの調子で説明しはじめた。

「だって、ごく初歩的な魔法が載ってるだけの魔導書ですら、正統な持ち主以外はひらけないよう封印の魔法が掛けられているのがふつうなもの。常勝無敗を誇る鳳翼無影流の奥義が載ってる伝書なら、当然でしょ？」

「ちえっ。おれにもうちよい魔法力があれば、ディスプレイして中身を見れたかもしれないのに……」

「もう、そんなことばっかり言って……。レグルスらしくないわよ！」

「……じゃあ、どうすればいいっていうんだよ！」

「そうね……。伝書や口伝くでんなんか頼らず、自分なりに工夫くふうして新しい技を創っちゃうっていうのはどう？」

「奥義といえるような新技を……。か？」

「うん。……だって、奥義っていつても、その昔に先達せいたうたちの誰だれかが自分の頭で考え、あみだしたものなわけでしょ？」

「……言うほど簡単にはいかないぜ」

「そんなことわかってるわ。でも、レグルスならきつとできる！」

じつと瞳を見つめられ、そこまではつきり言いきられては、沈黙するしかない。

ミアネージュは、掌をレグルスの額へと移し、言葉をつづけた。

「たしか、鳳翼無影流の極意ごくいって『その剣、神速しんそくなるが故ゆえに、影かげすら覚えおぼえず。これ、すなわち無影むえいなり』……だったわよね？」

「……ああ」

「少し抽象的な表現でわかりにくいけど、奥義ってけつきよくは、その流派の極意とされてることを、とことん突き詰めたところにあるんじゃないのかな？」

「……」

ミアネージュの言葉を頭の中で反芻はんすうしてみる。

極意をとことん突き詰めたところに奥義がある……。か。

おれだって自分なりにくふうして新技の開発かいはつぐらいしてるさ。

けど……。

いまいち突き抜けないんだよな。

目を閉じたまま、レグルスはあれこれと考えをめぐらせる。

「レグルス、眠くなっちゃった？」

気づけば、いつのまにかミアネージュの治癒魔法は終わっていた。

あまりにも気持ちが悪かったので、返事もせず、しばらくのあいだそのままにいると……。

「ひざまくらでもしてあげよっか？」

そんなせりふを、いきなり耳もとでささやかれ、レグルスはあわてて飛び起きた。

「まだ、どこか痛いところある？」

「こころもち首を傾け、ミアネージュが訊く。

レグルスは、あたふたと道着に袖そでを通してながら答えた。

「い、いや……」

「そう、よかった」

言って、ミアネージュはにっこりと微笑んだ。

「えーと、その……」

「ん？」

「いちおう、礼れいを言っところと思って……」

「いいわよ、べつにお礼なんて」

少し照れたようにミアネージュが言う。

「でも、ほんとうに感謝してるっていつんなら、きょう一日……つきあってくれない？」

「つきあうって、どこに？」

「いいから……」

レグルスが瞬間移動で連れてこられたのは、キャロルシードを一望のもとにできる丘の上の公園だった。

「ここからのながめって最高よね。キャロルシードの街並みが一目で見渡せる場所なんてここだけだもの」

手すりにもたれて遙かな地平に視線を向け、目を細めてミアネージュが言う。  
街を埋めつくす家並み。

その屋根の瓦かわらがオレンジ色で統一されているのは、空から見下ろしたときの街の美観を考えてのことか。

このキャロルシードの地下に、多層構造の古街や大迷宮が広がっていることは、ここに暮らすものたちにとっていわば周知の事実だったが、いざというときに、天空へと浮き上がる浮遊都市なのだと知るものは、意外なほど少なかった。

「んー、いい風。きょうはちよつと暑いくらいだから、ちよつどいいわ」

下から吹き上げてくる風がミアネージュの頬をなぶり、淡い金色の髪をなびかせる。

「こんなところあったんだ。知らなかったな」

「最近できたのよ。新しいデートスポットなんだって……。街でもっぱらのうわさよ」

「デートスポット？」

「うん」

ミアネージュがいたずらっぽく微笑みながら答える。

「なんでそんなところに……」

レグルスはそう言いかけ、ふと人目が気になって後ろをふり返った。が、公園の中は人けがなく、しんと静まり返っている。

「なんだよ、誰もいないじゃん。ここ、ホントにそういうところなのか？」

「まだ、夜になってないから……」

ミアネージュは心もち顔を赤らめ、視線をそらした。

よく見ると、公園のいたるところに木製のベンチがならんでいる。

「……なんだ、そういうことか」

ふたりの間に、しばし沈黙の帳しぼりが下りた。

レグルスは、話題を変えようとあたりを見まわし、広場の中央にある噴水に目をとめた。

「へえ、噴水があるんだ」

円形の大きな噴水である。水のカーテンに包まれるように、十二本の水柱が立ち上がり、踊っていた。

レグルスが地を蹴って宙に浮き上がり、そのままゆっくりと噴水のほうへと近づいていく。

ミアネージュも、レビテースの魔法でレグルスの後を追いかけた。

噴水を空から見下ろすと、まず目につくのが、水の底に煌めく光の幾何学模様だ。

六芒星ろくぼうせいの魔法陣である。

「この噴水はね、十二神殿のクリスタルの間を模して造られたものなんだって。ほら、噴水の中央、六芒星の上にクリスタルが浮いてるでしょ」

「ああ」

地上からは十二本の水柱が邪魔をして見えなかったが、ミアネージュの言葉どおり確かに人の背丈ほどもあるみごとな八角柱の輝石が、ゆっくりと回転しながらその場にとどまっていた。

「レプリカだから、ただ宙に浮いてるだけ。なんの力も秘めていないごくありふれた石だけど、すごくきれいだよね」

「うん、本物がどんな感じなのか、一度この目で見てみたい気もするな」

「そうね。でも、本物のクリスタルは、十二神殿の最下層にある、扉のない閉じた空間に安置されてるらしいから、そう簡単には見られないと思うけど」

「そのうち、ぜったい見に行つてやるさ」

「うん。でも、もし行くとしたら十二神殿のどこにする？」

「どこっていわれてもな……」

「このあたりだとファーナの神殿が近いけど、あそこはかなりレベル高いって話だし……」

「鳳凰や真竜の神殿にくらべればまだ楽なほうだろ？」

「それはそうかもしれないけど……。ま、わたしはべつに魔剣士の称号なんてほしくないんだけど、そのときはつきあってあげてもいいわ。迷宮の途中で、何か貴重なアイテムが手に入るかもしれないしね」

「魔剣士の称号？」

「あれ、レグルス知らなかったの？ 十二神殿にはね、その神殿の最深部にある鏡の間<sup>ま</sup>までたどりつくことさえできれば、無条件でもらえる称号ってというのがあるのよ」

「無条件で？」

「そう。たとえば、鳳凰の神殿なら賢者の称号をもらえるし、真竜の神殿なら竜騎士の称号、精霊の神殿なら召喚士の称号……。とか、神殿ごとにもらえる称号が決まっているの」

「で、ファーナの神殿は魔剣士の称号ってわけか」

「うん。……レグルスが魔剣士をめざしているのは知ってるけど、ファーナの神殿はまだ無理なんじゃないかな」

「ふん、そんなのやってみなきゃわかんないだろ！」

「それは、そうだけど……」

ふたりは、宙に浮いたまま会話を続けていたことに気がつき、どちらからともなく地上に降り立った。

「ね、レグルス、のど濁<sup>かわ</sup>かない？ わたし、いいお店知ってるんだけどな」

「自分のぶんは自分もちでよければ、つきあってもいいぜ」

「失礼ね、何もおごってくれなんて言っていないでしょ」

「そうか？」

「そうよ！ でも、そのお店、瞬間移動厳禁の区画にあるから、歩いて行かなきゃならないけど、いいよね」

「マジ？」

「もう、男はこまかいこといちいち気にしないの。ほら、行くわよ！」

ミアネージュはそう言うと、レグルスの手をとり、走りだした。